

# 成長の経路

——「一つの脳髓」にみる小林秀雄の（青銅時代）——

岡田浩行

## 一 反抗する青年

小林秀雄は第一高等学校生だった当時、慶応義塾生を母体とする同人雑誌『青銅時代』に小説二篇と批評一篇を発表している。小説「一つの脳髓」は大正一三年七月の発表で、『青銅時代』に掲載された小林の最初の作品となる。家族ともめごとを起した〈私〉は一旦東京を離れるも、かえって気を病んでしまひ湯河原で一泊しただけで翌日帰京する。例えば志賀直哉「ある一頁」（『白樺』明治四四・六）がそうであるように、いくら青年らしい反抗心をもって家を出ても、すべきことや居場所などがあるべくもなく、結局家族のもとに戻るしかない、そういう反抗的な青年の家出の典型的な成りゆきをとにかく〈私〉もたどるわけである。

江藤淳の作家論によれば、小林秀雄は「子」ではありえない自分を、いかに「子」として存在せしめたらよいか企てたという。そして作者と同一視される「一つの脳髓」の〈私〉の解釈は、そうした小林秀雄像が全面的に反映されたものとなつ

ている。ところが実際には〈私〉は「子」ではありえないどころか〈神経衰弱〉という思春期病理を病む紛うことなき青年ではない。また「子」として存在することを願うならむしろ目的であつてもいい青年らしい反抗心を〈私〉は、相手よりかえつて自分を不愉快にするだけ持て余している。当初反抗的に家を出た〈私〉であつたが、かといつてそんな稚氣を認められもしないようなのである。

またあらかじめ言えば、〈私〉にむしろそうした成長への志向があることこそ、この小説が同時代の青年言説に应对する接点ともなる。大正一三、四年は同人雑誌が飛躍的に増加する時期である。当時の同人雑誌はかつての〈投書欄〉の代替とも捉えられるように、作家志願の青年たちが研鑽を積む場であつた（『個人雑誌と同人雑誌の輩出』『文芸年鑑』大正一五・二）。

同時期、関東大震災からの復興が新時代の呼び声をおおるのに乗じて、自分たちの世代を〈若い王侯〉とアプリアオリに価値づける戦略をとつたのは『文芸時代』である（川端康成「創刊の辞」『文芸時代』大正一三・一〇）。しかしすでに『文芸春秋』同人であつたというような経歴をもたない『青銅時代』の

同人たちは、青年であることを自賛すべくあまりに青年であり過ぎたとも言える。

つまり《私》にとつて《大人》であることは決して自明のことでも何でもなく、《子》であろうとするどころか、むしろ逆なようなのである。

## 二 無自覚がまねく傷心

成長への志向を《私》の裡に認めようというわけだが、このことの意味は、ひとえに、これまで「一つの脳髓」論の解釈コードとなつている《自意識の敗北》という江藤淳の解釈を再検討することにある。後の議論に属することではあるが、湯河原からの帰り際、船を待ちつつ歩いた砂浜の足跡を《私》が《脳髓》についた下駄の跡》と思つていたのが、振りかへつてみて実は《砂地に一列に続いた下駄の跡》だったと捉えなおすのだから、なるほど《私》は最後まで反省的であつた。従来この反省を《敗北》とし、その《敗北》の劇を演じる自意識こそが、他ならぬ小林秀雄を特異化し、それも志賀直哉と対照させて特異化するのが常であつたが、これはどこまでも江藤論を規範としていたのである。江藤淳の言う《子》とは志賀直哉に他ならず、したがつて小林についての作家論の意味するところとは《自分が志賀直哉になれるか》と志向するも結局志賀直哉たれないということなのであり、それはこの自意識ゆえだからというわけである。

しかし《自意識の敗北》という解釈が成立するのには、まず

《私》を個性などまつたく捨象するかたちであたかも自意識それ自体と捉える必要があるが、その《私》にはそもそも無心に《煙草の遊戯》にふける子供らしい一面さえある。さらに《脳髓》が自意識を表象するという解釈も自意識を特異化する一根柢となるが、これも、それならなぜ《脳髓》が石化した段階で《私》が平常心に戻れないのかなど、解釈上疑問が残る。また少なくとも「一つの脳髓」の分析で示されてきた自意識の《相對感覺》（江藤）なら、志賀直哉をはじめ同時代の小説に多数見出すことさえできる。《自意識の敗北》とは、他者論から狭隘に抽象化したコンテクスト以外のものではないのである。

再度この小説の特徴を捉えなおす必要があるが、特に《私》についてそれが言える。例えば、真鶴港まで定期船心太丸に乗船し、真鶴から湯河原まで乗合自動車で移動する、その間の、従来看過されがちではあるが量的に小説を半ばする風物の観察から、《私》の次のような性格傾向を見出すことができる。

《私》は体験するものを、《厭な音》、《痛いのはいゝゝ》、《痒くなつては堪らない》、《痛々しい、厭な気を起させた》、《いゝ音を立て、鳴つた》、《気の利かない話だと思つた》、《自分の身体も勿論、彼等と同じリズムで慄えなければならぬ。それが堪らなかつた》（傍線、稿者）と、好悪の気分で判断しているが、この判断の仕方は基準を自分の感性におく点で、自己中心的で気分本位と言える。また《私》の気分本位はきまぐれで、例えば渡し船の船頭の足の傷を見て《厭な気》をおこすも、心太丸に近づいた途端、水中に透かして見える推進機と吃水線を美しく感じたり船のあいだの水音を《いゝ音》と感じる、また他の

船客と同じリズムで慄えなければならぬのを堪らなく思い  
〈不機嫌な顔〉をしていると思うと、船の振動によって煙草の  
煙が輪になる〈煙草の遊戯〉に元気づくといった具合である。  
同時に〈私〉の気分本位は逆説的でもあって、例えば〈腫物〉  
が脳にできて、痛いのはいいが痒いのは堪らないと思つた  
り、消毒剤として用いられる〈石炭酸の匂ひ〉を不潔に感じた  
りしているのである。この気まぐれでかつ逆説的であること  
は、〈私〉の気分本位な好悪の判断がいかに直截的であるかを  
示すものと言えよう。仮に予期不安といった既成觀念に捕われ  
ていたなら、判断は典型的になるはずだからである。ところで  
これは意外性に富んだ子供の性格傾向の特徴でもある。

そんな自分を自覚・自省する契機となつたのが、乗合自動車  
の車掌の存在である。従来全く看過されてきた車掌であるが、  
〈子供の様な顔〉をし〈ロシヤの兵隊のおもちや〉といった恰  
好で、〈私〉によつていかにも子供らしい外見と捉えられてい  
る。車掌は自動車馬と接触した際、馬主に謝りながらも車内  
に戻ると〈往來におツ放して置く法はない〉と馬主の非難をす  
るのだが、それは運転手の言葉の鸚鵡返しである。その態度  
は、大人に従順でかつ模倣を好む種類の、子供の態度を想起さ  
せる。さらに道中、母親が車掌にわざわざ弁当を渡そうとした  
のに、〈私の顔を偷み見て〉殊更に迷惑がつて受けとろうとせ  
ず、また妹に対し〈黙つて外方を向〉くなど、同世代の〈私〉  
の前で家族の者を憚つてみせる見栄の張り方も、自身の自立を  
強調しないではおれない子供らしい態度と言える。その結果、

車掌は何んだか消気てゐた。

というのは、母や妹に冷淡な態度をとることが決して車掌の本  
意ではないことを意味している。しかも無自覚のうちにそうし  
てしまつたであろうと推測されるのは、行きずりの〈私〉に見  
栄をはると言うことが母親の心づくしを無にすることに較べ、  
あまりに他愛ないことだからである。車掌は自分の無自覚な見  
栄や反抗心によつてかえつて自分自身の心を傷つける自家撞着  
に陥っているわけである。〈私〉に車掌が子供っぽく見えるの  
は、そんな自分の心中の見栄や反抗心を持って余す車掌だからで  
あり、そこには〈私〉の車掌に対する批判意識が働いていると  
言える。

翌日〈私〉が真鶴港まで戻る際、車掌は乗合自動車の出発時  
刻につき、松葉杖の男に時計のくるいを指摘され、〈子供が痲  
癩を起した様な顔〉をする。〈私〉は乗車を拒否し港まで歩く  
のだが、それはこれ以上反抗的な車掌の子供っぽさを見ること  
に堪えられなかつたからではなからうか。反抗心から家出して  
きた〈私〉には車掌の子供っぽさは自分の子供っぽさを見せつ  
けるものともなりうるだろうからである。そもそも〈私〉の性  
格傾向は子供らしかつた。例えば航行中〈不機嫌な顔〉をして  
いた〈私〉が心太丸の船橋に立つ煙突をまねて煙草を吸うこと  
には子供の模擬心が、それによつて一転して元気づくことには  
子供の気まぐれさが窺える。ところで、模擬心や気まぐれさと  
は〈神経質のコドモはよく真似る〉、〈コドモの気分は変り易い  
のであります〉が神経質のコドモの気分は一層その変化が著し

い」と、《神經衰弱》な子供の特徴とされており（三田谷啓『子供の神經質』昭和三・一）暗示的である。また翌朝一日で実家に戻ることを自分のメンツを気にして躊躇するのも、子供らしい虚勢ゆえである。

この晩から《私》は車掌の無自覚さを焦点として自覚と自省を強いられることになる。結果的に《私》が、車掌の傷心の根本原因を自身の見栄や反抗心に無自覚であることに見出したことが分かる。

### 三 自覚される意志と衰弱する神経

湯河原の温泉宿に投宿し、翌日、迷ったあげく帰京を決意、歩いて真鶴港まで行き、最後に港で船を待つというのが旅程の残りの半ばである。

《私》が車掌と会って直後の宿での夕食の時、《私》ははじめて問題の《脳髓》を、まず《女中》の頭中に想像する。

食欲は無かつたし、話すのも億劫な気がして、何んとなく不機嫌な顔をしてゐた私の傍で、女は一人でよく喋つた。

私は、女のだゝつ広いおでこの内側に駝鳥の卵の様な、黄色い、イヤにツル／＼した脳髓が入つてゐる事を想像した。女の喋る言葉が、次々にその中で製造されてゐると思ふと滑稽な気がした。然し、知らぬ間に私は、地震で何処の温泉は湯が増えたとか、減つたとかと云ふ話に、骨を折つて調子を合せてゐた。

《女の喋る言葉》が《脳髓》の中で《製造されてゐる》という想像の機械的な感触は、《私》が女に意志や情感を感じられないことを示している。たしかに女に対する《私》は、《話すのも億劫な気がして》《不機嫌な顔》をしていたというものであったから、《私》にはそれにもかまわず喋る女が話したくて話しているようには思えなかつたのであろう。とすると《私》にとつて《脳髓》とは自意識などではなく、むしろそれは逆の、意志によって動機づけられていない無自覚な発話を統制する仮想の中枢器官ということになる。《私》が問題視しているのはたしかに無自覚な行動なのである。

ところが一方で《私》は、自分も女の話に《骨を折つて調子を合せてゐた》ことに気づく。実は《女は一人でよく喋つた》のでは決してなく、《私》が《調子を合せてゐた》からしやべつていたのである。無自覚な行動を統制する《脳髓》が《私》にもあると自覚されるのはもとより、女の《駝鳥の卵》を滑稽がる自分をも自省し《俺の脳髓を出して見たら如何なに醜い格好をしてゐるだろう》と思うこととなる。

車掌の《私》に対する見栄も、《私》から見た女の接待も、女に対する《私》の応答も無自覚な行動である点で一致している。しかもこの無自覚さを《私》がどう捉えているかは、自分の《脳髓》を《醜い格好》としていることに暗示されている。従来《脳髓》が《病んだ脳髓》や《鋭利すぎる自意識》とされるのは《脳髓》がこのように醜いものと形象化されるからと考えられるが、食事中の世間話を成立させる《脳髓》は格別病的

とは言えない。醜い〈脳髓〉はむしろ〈脳髓〉への〈私〉の悪意を反映しているとすべきで、要は〈私〉は〈脳髓〉が自分のなかで機能すること、換言すれば自分が無自覚な行動をとることを拒んでいるのである。これは、この後睡眠薬や気付け薬で〈私〉が〈自分の頭を玩弄〉してあることが、端的に〈脳髓〉に対し主導権を握ろうとする〈私〉の志向を象徴していることからも指摘できる。

ひとまず〈私〉がすべてに自覚的であろうと思うに到った過程は、自分の内なる反抗心・自立心に無自覚であるがゆえに振りまわされる車掌を目的に当たりにし、それを無自覚な稚気ゆえの自業自得の結果と考え、みずからにはその無自覚を戒めたと想定できる。自分はすべての行動に自覚的になることで、盲目的な反抗によって母親をはじめとした肉親そして特に自身自身をも不愉快にする矛盾に陥止めをかけ、青年らしい反抗心から自由になろうとした。その意味で〈私〉はたしかに成長を志向しているのに違いない。

この晩〈私〉は小説を書くこととして失敗する。

然し書き出して見ると自分が物事を判然と視てゐない事に驚いた。外界と区切りをつけた幕の中で憂鬱を振り廻はしてある自分の姿に腹を立て、は失敗した。

しばしば自意識の主体である〈私〉が現実認識を目的としているとする根拠となるこの場面も、〈視てゐない〉〈外界と区切りをつけた幕〉といった認識に関する反省的な表現より、〈憂

鬱を振り廻はしてゐる自分〉と車掌の姿との類似に注目すべきである。と言うのもその認識の表現が小説の書けない理屈として常套なら、創作が人間の成長に重ねられるのも珍しくなく、むしろそれまでもすると〈不機嫌な顔〉をしていた〈私〉があたかも車掌のような自分の〈憂鬱〉を特権化していないことの方が解釈上、重要だからである。

ところがすべてに自覚的であろうとする成長への志向は、精神衛生上きわめて危険なものであった。〈私〉は〈神経病時代〉、壁を舐めた経験があった<sup>11)</sup>。ところがこの晩も壁をみつめていたうちに〈私〉は、

と、急にドキリとした。立ち上ろうとしてハッと浮した腰を下した。

という。立ちあがろうとする無意識裡の行動は〈私〉の〈神経衰弱〉がすでに再発していることを示す。再発するには理由がある。そもそもすべてに自覚的であろうとすること自体が、すでに〈神経衰弱〉的なのである。

「一つの脳髓」が〈神経衰弱〉を題材としたことについては、同時代的な必然性をもっている。〈神経衰弱〉症とは、〈頭痛・眩暈・不眠・耳鳴・肩凝・腰の痛・感冒感・心悸亢進・消化不良・多尿・陰萎・自分が自分でない感・記憶不良・読書不能・書癡其他の職業痙攣・諸種の強迫観念〉（森田正馬「慢性の神経衰弱はかうして治せ」『実業之日本』昭和七・四）など、いわゆる神経症やノイローゼの症状である。大正時代は、

精神医学として〈神経衰弱〉のこうした病類・位置の確定作業が進むとともに、注射治療などの物質療法や精神分析を含めた精神療法の確立期にあつてゐる。とくに現代の森田療法の確立者で倉田百三の〈神経衰弱〉症を根治させるといつた医療実践のほか、中村古峽『変態心理』の協力者として啓蒙的な執筆もしていた森田正馬は、『神経質及神経衰弱症の療法』（大正一〇・六）を上梓し、〈特殊療法〉という精神療法を確立する過程で〈神経衰弱〉症者の心理機制を説明してみせてゐる。

森田の提示する心理機制とは、人前で赤面するといつた普通の人でも経験する何でもないことをへ一度び気を注いだ為に、甚しき煩ひをなす<sup>①</sup>という、単純だが当時において独特なものであつた。すなわち例えば〈左足と右足をどんな場合に運んで居るのか〉、〈毎日使つて居る茶碗の模様は如何〉、〈感情でも一日の内には絶えず様々の変化動揺がある〉といつた、通常無意識裡に認められる〈行動〉〈知覚〉〈感情〉に注意の集中を起し、へ々自分の事に注意を向ける為に却つて身体が硬張り、流暢に行はれず<sup>②</sup>と、感覚を鋭敏化させてしまふというのである。

〈私〉の、すべてに自覚的であろうとする仕方での成長を志向することは、行動の瞬間にまで内省的であろうとする点で注意の集中に他ならない。したがつて〈私〉は、

「もう舐めないぞ」と冗談の様に呟やうとしたが声が出なかつた。私は何んとなく切ない、真面目な気持でどつと坐つてゐた。

と、逆に行動を疎外する感覚の鋭敏化の徴候を示すことになる。〈もう舐めないぞ〉と言おうとしたのは、壁を舐める動作が無意識裡のものであるのに対し、その言葉自体は〈神経病時代〉は過ぎたという自覚に基づいてゐることから、すべてのことに自覚的であろうとする志向に則つた行動と言える。ところが壁を舐める行為は、直接にはこの直前の〈海の広い空気に、子供が乳首に吸ひ付いてゐる〉という転地療養中の結核患者形象を模倣するものであり、同時にそもそも近代的自我の形成の装置でもあつた壁が、都会生活・近代生活がもたらす〈文明病〉<sup>③</sup>と考えられている〈神経衰弱〉症者に救済を与えるものとして文学作品に形象化されてきた事情から、単なる奇行と言ふより〈私〉にとつては救済の手段となりえたかも知れないのである。その意味で素直に舐めてもよいところを、〈もう舐めないぞ〉と言ふのは〈神経病時代〉は過ぎたという自覚を守らうと精神の平静を装つてゐるに過ぎず、〈神経衰弱〉の再発という事実にもたしても無自覚な抵抗を試みているのである。いわば青年の厭い方がまた青年らしいのであり、そこに無理があることには睡眠薬をのみつつ〈俺の頭よ。許して呉れ〉と謝る〈私〉も半分気がついてゐる。〈私〉の成長の志向が挫折するのは既定のことと言わざるをえない。

#### 四 無自覚な行動への注意の集中

とは言え、翌日真鶴港へ行くまでは、すべてに自覚的である

うとする試みはともかくも成功するかのようなのである。例えば途中、

新鮮な木の香がした。其の何時にないすがすがしさが自分如何してもそぐはない気がした。その癖すがすがしさが感じてゐた

とは、朝から念頭にあつた不安な状況に照らし、自発的な感覚を否定してさえている。すでに来る時の自己中心的で気分本位な〈私〉とは別人の観がある。ともかく感覚が検証されるのは、その感覚の喚起が意志したものでなかつたからに違いないが、そもそも感覚とはそういうものではないだろうか。こうした感覚までも対象とする潔癖なまでの反省が結局、

丁度自分の脳髓をガラス張りの飾り箱に入れて、毀れるか毀れるかと思ひ乍ら捧げて行く様な気持だつた。然しいつの間にか、それは毀れてゐた。そして重い石塊に代つてゐた。

と、無自覚な行動の主体である〈脳髓〉を破壊してしまふ。すると、ひとまずすべてに自覚的であらうとする試みは達成されるかのようなのである。

〈私〉は湯河原への峠を下りたところで車掌に時計の狂いを指摘した松葉杖の男に会う。男は車掌の〈痲癩〉のせいで出航に間に合わなかつたと不平を言う。ただその男の〈忌々し相に

皺を額に造つてみせたという芝居がかつた仕種は、むしろ大人の寛容さを示している。一方〈脳髓〉を失つたことで〈私〉は、〈は、あ、成程、俺は此処で苦笑といふ奴をすればいいのか〉と判断したうえで、つまり明確な自分の意志で〈信玄袋を擔いで来た赤帽の様に肩の上に乗つかつた石塊を振つた〉という行動をとれている。しかし〈私〉の相手の言葉に対するぎこちなさは、どうにも自分が感じ、思い、することが、自分のように思えないという〈自我感覚異常〉を呈しているようで〈神經衰弱〉の様相が色濃い。それは〈自我感覚異常〉者の〈歩行するにも、他人の首が歩き〔中略〕腕も肩も総て他人のものやうに感ぜられる〉という症状に異ならない。

〈神經衰弱〉症状を示しながら、意志によつて自覚的に行動することがあくまでも不自然であつて、その実践がすなわち人間の成長とはならないことは、最終場面で明瞭になる。〈私〉は真鶴港の汀で〈砂地に一列に続いた下駄の跡〉と〈脳髓についた下駄の跡〉との違いに驚いている。

次の船は仲々出ない。私は赤い錆の様な汀に添ふて歩いた。下駄の歯が柔かい砂地に喰ひ込む毎に海水が下から静かに滲んだ。足元を見詰めて歩いて行く私の目にはそれは脳髓から滲み出る水の様に思はれた。狭い濱の汀は、やがて尽きた。私は引き返へ相と思つて振り返つた。と、砂地に一列に続いた下駄の跡が目映つた。私はそれを脳髓についた下駄の跡と一つ一つ符合させる様に眺めた。私はもう一步も踏み出す事が出来なかつた。そのまゝ、丁度傍にあ

つた岩にへたばつた——。

松葉杖の男が私の下駄の跡を辿つてヒヨコ／＼と此方にやつて来るのが小さく見える。

私は、その蟲の様な姿を何か有難いものゝ様に見守つた。

《脳髓》が石化した状況下にあつてなかつ、《脳髓》に《下駄の跡》をつけているという《私》の自覚的な行動は完遂されることはなかつた。《砂地に一列に続いた下駄の跡》は、人間が行動するに際し究極的に自覚的であることは不可能であることを《私》に悟らせた。

しかしだからと言ってこのことを、江藤淳のように《自意識の敗北》とすることも、綾目広治のように小林秀雄の芸術に対する懷疑を結果する意志と行動との不一致の発見とすることも、長井政司のように志賀直哉との資質の違いの論拠とする<sup>21</sup>ことも、いわば無自覚な行動の表現の絶対化であり過大評価ではないと思うのは、まず既述したごとく、《私》が志向するのは、自覚や自意識それ自体ではなくあくまで成長であること、さらにはこの無自覚な行動の表現自体は大正時代に《神経衰弱》を題材とした数多くの小説に用いられているからである。例えば志賀直哉「濁つた頭」〔白樺〕明治四四・四〕中の、津田君（＝私）が服を脱ぎうとして電灯を消す場面である。

暗くなつて、あつと声を出しました。「中略」シャツを脱ぐといふ行為とは時間的に一直線上で後に続く考の他は何にも思つた事はなかつたのです。それがどうして、何の連

絡もない、灯を消すといふ行為に變つたのだらう？ 運動神経が中枢の命令を途中で変へるといふ事は考へられませんが、私はこれは頭が狂つて来たんだ、と思はないわけには行かなくなりました。

《物を云ふにも云ひたい事が、直ぐ口に出て来ず》という《神経衰弱》症状を示していた津田君の《灯を消すといふ行為》は無自覚な行動である。こうした無自覚な行動の表現は、志賀直哉によつてこの他にも「剃刀」〔白樺〕明治四三・六、「クローディアスの日記」〔白樺〕明治四五・九、「范の犯罪」〔大正二・九）といった、おもに第一創作集『留女』（大正二・一）所収の初期小説に散見される<sup>22</sup>。

《神経衰弱》を題材とした小説は明治末期から数多く見られるが、この時期に小林より上の世代では志賀のほかは広津和郎や佐藤春夫、豊島与志雄、ほぼ同世代の作家では横光利一、中河与一などが、本格的に心理描写による《神経衰弱》の表現に取りくんでいる。あくまで解釈以前に把握可能な登場人物の心理として、単に事前に意志しない場合のみならず意志した場合でも、それとは別な行動をする、あるいはしそうなことまで含め、無自覚ということをゆるやかに規定すると、無自覚な行動の表現は彼らの小説に散見されることとなる。すなわち、《彼はそんな事は少しも望みもしなければ予期もしなかつたのに、はつと気がついた時には、彼の掌がその給仕の横面を力委せに一つ撲つていた》（広津和郎「神経病時代」『中央公論』大正六・一〇）、《おれは泣いてゐるのか知ら。どうして？何のた



めに？誰のため？何も今更に泣くことは無かつたのに。いや、やはり泣いてゐるらしい。泣いてゐる」（佐藤春夫「侘しすぎる」『中央公論』大正二二・四）、〈眼の前の惨めな男を殴りつけるといふ意志に、次第にはつきり氣付いてきて、實際それを決行するかも知れないといふ恐れから、無理に引離れた自分の視線が、丁度向ふ側の、硝子器具を商ふ店の中に落ちたのだつた〉（豊島与志雄「悪夢」『改造』大正二二・八）、〈自分の口が氣持ちと全く放れたことはかりを云つてゐる〉（横光利一「愛卷」『改造』大正一三・一一）、〈その時「おや」と思つた。彼はふところを探つてみた。無い筈だ。手紙は投げ込んだんだから〉（中河与一「悩ましき妄想」『新公論』大正一〇・六）と、枚挙に暇がない。〈神経衰弱〉とは心因性のもので、したがつてその症者は内向的であるために意志の有無および妥当性を検証するのは必然的であると言えるわけで、〈神経衰弱〉が無自覚な行動をもつて表現されることになるのは当然であるとも言える。したがつて「一つの脳髓」の同時代的新しさとは、無自覚な行動の表現を含む〈神経衰弱〉症者像にはなく、むしろこの自覚的であろうとする目的、すなわち成長への志向にこそあつたとするのが妥当なのであり、「一つの脳髓」中の〈神経衰弱〉とはあくまで〈私〉の成長への志向の神経症的偏重を表象しているはずである。実際、当時にあつては〈神経衰弱〉が思春期病理という側面をもつことは専門医も認めるところで、森田は〈青春時期には屢々神経精神的の異常を起す事が多い〉（『中学時代に多き神経病性苦悶状態』『児童研究』大正七・六）としていた。それは〈書生病〉（試験病）（神保三郎

『変り者』明治四五・六<sup>21</sup>）といったイメージと連関しつつ、例えば加宮貫一「詐病患者」（『随筆』大正二三・九）中の〈私は神経衰弱などと云ふ奴は、性に眼醒める頃になると誰にでも来るあの変な悩み位にしか思はなかつた〉という理解などもあながち主人公の偏見とはさせずに、当時固有の神経症理解を形成していたのである<sup>22</sup>。

## 五 自己同一性の覚醒

究極的に自覚的であることが不可能であることを悟つて、しかもなお〈私〉は再び〈憂鬱〉を振りまわすことはなかつた。決してそれは成長の志向の挫折や不可能性を意味しはしなかつたのである。同じ『青銅時代』同人、木村庄三郎の小説と対照することではより明瞭となる。

『青銅時代』については、吉田潔生によつて「一つの脳髓」が「日常的なリアリズムを基調とした『青銅時代』の他の作品に比べて新鮮さを持つているし、密度も高い」と価値づけされて以降、看過されてきた。しかし少なくとも同時代にあつて、同人間でもっとも評価されていたのは、木村庄三郎なのである。

『青銅時代』の木村庄三郎君は、最早所謂『同人雜誌』の作家の域を越えて、『三田文学』の新鋭といふ方が本当かも知れない。この作家のものは手固いといふ点では、『青銅時代』時分から、既に一家をなしてゐた。

と、広津和郎は評価している（『二三の作家について』「新潮」大正一五・一〇）。『青銅時代』では「外様」格の小林は「一番認められてゐた」木村を意識したことだろう（永井龍男「一つの脳髓」『四季』昭和九・一一）。特に木村の「或る病院の生活」（『青銅時代』大正一三・四）は「一つの脳髓」における「私」の成長の志向が『青銅時代』同人間に共有されていたことを示している。

「肺炎加答見」を病んだ「自分」は「相州七里ヶ浜の、或る結核療養院」で転地療養をしていた。「自分」は重症患者の「O」に対し、当初は深刻な同情を抱いていたし、またそんな自分に「満足」していた。ところが末期症状となり「脳症」を起し平常心を失った「O」に「自分」は中傷される。ある秋晴れの午後、海岸への散策の途中、「自分」は「O」の死を知らされ衝撃をうける。

結核患者に対し「神経を病まずにはゐられない病人の気持は悲しかった」という同情の仕方をする「自分」は、結核症状と「神経を病む」ことを相即して捉えている。もともと森田正馬によれば「肺炎カタルとか、胃腸病とか、飢餓とか、其他総て重病の時には、「中略」神経衰弱症の状態となる」ので、当時にあって医学的に根拠がなかったわけではない。ただ「自分」にとって「神経を病む」ことは道徳意識の問題でもあった。（「階上三区」の六人のうちもつとも重症の「O」は「脳症」からいわれなく他人をのろう、「自分」以外の四人は「重症者」を同情するどころかかえって「自分たちの怖い未来を

暗示」する「嫌厭すべき存在と思ふような「病人かたぎ」に陥っている、もつとも「軽症者」の「自分」だけが同情心をもっているので、「病人かたぎ」を脱してゐたと自覚されている。「肺炎加答見」を病む青年は道徳心の獲得を志向していると言えろ。

しかし「自分」は「Aさん」から「O」の死を知らされると同時に「O」によつて死の間際まで自分がのろわれていたことをも聞かされる。

Aさんに別れると藁屑や貝殻の散らばつた、あまり綺麗とは云へない砂浜を遮つて、だら／＼道を電車通りに出た。その、鈍く鉛色に光つた線路の上を、地上に紫のかけを落しながら、雀が五六匹一列になつて、ピョン／＼と歩いてゐた。——それを見てゐると、自分はふと、Oに対して、——すでに、何もかも赦さるべき、ほとけになつたOに対して心からの、ハツキリした憎悪を感じてゐる自分に気がついた。さう云ふ自分自身を見出さうとは、余りに思ひがけなかつた。信じてたものに、叛かれた形だつた。自分は鳥渡ドギマギした。——今までの自分の周囲の世界が、何処かへ引ッ繰り返つてしまつた。見知らぬ広野に、たつた独りポツチ、抛り出された感じだつた。身うちのゾツとするやうな、頼りない、泣き出したいやうな淋しさ、ジーンと、肚の底からツキ上げて来た。……………自分自身は埃ッぽい往来を、病院の正門に向つて歩いてゐた。

同時代的に死を表象する「線路の上」<sup>28</sup>に、一列になつた五六匹の雀とは、「階上三区」の六人に他なるまい。結核菌と戦ひ死のはざまにいる彼らは、まさに「線路の上」にいる雀なのである。そんな雀を上から見たとき、「自分」ははじめて自分を真に客観化した、「O」への憎悪を自覚したわけだ。「自分」は自分に「叛かした」が、元来「自分」にとつて「O」への同情とは自己満足でしかなかつたし、「病人かたぎ」を脱してゐるという自信も、自分のうちなる「病人かたぎ」を自覚することから「敷蛇々々」とでも云つたやうに、逃げ出していた結果であつた。「信じてたもの」がそもそも偽装された道德意識であつてみれば、「泣き出したいやうな淋しさ」を抱いた今の方が、少なくとも誠実であると言えよう。その誠実さが、真の道徳心の成立条件であるなら、結末部で「O」に対する「ハツキリした憎悪」を「自分」が自覚したことは真に道德的であるために必要不可欠な自己覚醒に違ひなく、道徳心の喪失を意味するどころか逆説的にその獲得を意味してさへいると言へる。

ところで「或る病院の生活」の結末部と「一つの脳髓」の結末部とが酷似していることは一見して気づくことである。ともにある目的意識をもちつつ、かえつて神経症的になる主人公像も同じなら、目的の遂行が結末部で挫折し茫然自失するに到る展開も同じである。この挫折の構成が逆説を含蓄する技術として了解されたことを小林の追隨が示すなら、この構成上の類似は、「私」の挫折が、「或る病院の生活」の「自分」にとつてそのうであつたように、「私」にとつてもまた成長への一端緒を逆説的に意味することを可能にする。

たしかにすべてに自覚的であろうとする仕方での成長への試みは挫折した。しかし「私」を追つてこちらにやつてくる松葉杖の男の「蟲の様な姿」を「何か有難いもの、様に見守つた」という「私」の心情は、もはや以前の「いい」「堪らない」といった気分本位なそれではない。はじめて「私」は自分以外の人に「有難い」と思ひを致すのである。せつかく弁当をもつてきた母に対し「迷惑相」にする車掌との違いは歴然としており、たしかに「私」は一步成長したと言へる。その成長とは思ふに、潔癖なまでに自覚的であることをやめるといつた心境の変化であり、それは要は無自覚な行動を含めて自分自身なのだという同一性觀念の自己覚醒に他ならない。その自己覚醒があくまで成長であつて、無自覚に反抗する青年への退行を意味しないのは、真に問題だつたのは、青年が「大人」を装う無自覚さより、むしろ偽装できると思ふこと自体、自己の同一性は自分にとつて任意であると思ふこと自体であつたからだと考えられる。

なお同一性觀念の獲得という結果に対し「神経衰弱」症のな目的意識は、逆説的であるため偶然にしかすぎないようであるが、実は必然的な因果關係にあるはずであつて、後の小林秀雄の芸術論を構成するのに与つて大きいのも、いくぶんの読み換えを条件にしてだが、この逆説的な關係に他ならない。「自己意識の敗北」という読みはこの逆説性を示せないことから無効なのである。

ともあれ自分自身に対する覚醒をもつて「神経衰弱」症の偏奇な心理機制を克服し、かつ融通無碍な生き方を発見する企図

こそが、同人誌『青銅時代』という場で試みられた新しさではなかったか。「一つの脳髓」も、そうした点で意味をもち、また新しかった。吉田溧生によれば、『青銅時代』という誌名は、ロダンの彫刻『青銅時代』(L'Age d'Airain)に由来するとい<sup>②</sup>う。ロダンの最初の代表作」と目された彫刻の題名である。『青銅時代』とは云ふまでもなく青年を意味する(富永惣一『ロダン』昭和二四・七)のであるから、同人たちはこの彫刻に習作期にある自分たちを仮託したに違いない。さらに、『自然』に醒めた人(『白樺』明治四三・一一ロダン号)、〈敗北者 (Le Vaincu)〉(富永)といったその彫刻の別名が、『青銅時代』という人生の一階段に通過儀礼として青年が手にする報酬と代償をはからずも示しているとする、挫折感を代償に自己覚醒した青年が成年となる、「或る病院の生活」と「一つの脳髓」とは、もつとも『青銅時代』らしい小説だったと言える。

### 註

- (1) 『青銅時代』は、大井真一郎、狩谷太郎、高橋宏、寺方徹、寺田重雄、富田正文、中村宗衛、野川日出雄、橋本敏彦で発刊、木村庄三郎も早い段階から中心的な執筆者であった。小林秀雄は石丸重治、永井龍男、波多郁太郎とともに、その六号から八号にかけて作品を発表、八号合評会で同人と意見対立し脱退したという。永井龍男「一つの脳髓」(『四季』昭和九・一一)、吉田溧生『国語と国文学』昭和三五・一一(一)、「作品解題」(『小林秀雄全集 別巻Ⅱ』平成一四・七)参照。
- (2) 江藤淳『小林秀雄』(昭和三六・一一)。以下、江藤淳の引用は同書から。
- (3) 無論江藤淳に反し他者の発見を認めなかったり(根岸泰子「小林秀雄

と昭和初期」二冊の講座 小林秀雄』昭和五九・八)、積極的に偶然の美の獲得と意味づけたり(佐藤昭夫「『一つの脳髓』試論」実践国文学』昭和四八・七)、小林秀雄の芸術への懐疑を読む(綾目広治「小林秀雄『宿命の理論』」国文学攷』昭和五七・九)など結論はまちまちだが、それは評論上の違いであって、〈自意識の敗北〉と解釈する点は異ならない。

ほかにこの小説を自意識によつて特異化し、〈自意識の敗北〉を読む論として、村松剛「小林秀雄の小説」(『解釈と鑑賞』昭和三六・一一)、吉田溧生「小林秀雄の半世紀」(『国文学』昭和四四・一一)、亀井秀雄「小林秀雄論」(昭和四七・一一)、桶谷秀昭「批評の運命」(昭和四九・二)、野田俱一「小林秀雄と狂女」(駒沢国文』昭和五〇・二)、佐藤悦子「小林秀雄」(『国文』昭和五〇・一二)、大久保高樹「二つの日本語訳ランボオの問題」(上)、『比較文学研究』昭和五三・五)、樫原修「小林秀雄の〈私〉小説」(『国語と国文学』昭和五三・六)、清水孝純「小林秀雄とフランス象徴主義」(昭和五五・二)、栗津則雄「小林秀雄論」(昭和五六・九)、高橋英夫「考える人」(『新潮』昭和五八・四)、勝又浩「小林秀雄」(『群像』昭和五八・五)、饗庭孝男「小林秀雄とその時代」(昭和六一・三)、阿部到「小林秀雄論」(『鹿児島女子大学研究紀要』平成一・三)、長井政司「一つの脳髓」論(『立教大学日本文学』平成三・七)、車谷長吉「小林秀雄の小説」(『新潮』平成一三・四増)など。

- (4) このうち江藤のように志賀直哉と対照させて特異化するのには、村松、亀井、佐藤昭夫、野田、佐藤悦子、大久保、栗津、綾目、高橋、勝又、根岸、饗庭、阿部、長井論である。
- (5) 吉田溧生「初期の小林秀雄」(註一)、佐藤昭夫(註三)、佐藤悦子(註三)、神谷忠孝(「自意識とその彼岸」国文学』昭和五一・一〇)、清水孝純(註三)、高橋英夫(「考える人」『新潮』昭和五八・四)など。

(5) 吉田(註一)の指摘するとおり、黄・赤・青といった原色を中心とした色彩の形容や、実際にはありえない水中の魚の(生臭い匂ひ)まで感じることも、感受性自体の直截と鋭敏さを示そう。樫原修(註三)

は風景描写、とくにその比喩表現について〈私〉の〈感受性〉とべ  
々続きで〈外界〉としての資格を失ふ、ついでとし、〈私〉の失敗  
した小説への自己評言を「一つの脳髓」にも適用しようとするが、  
これは今日の視点に依拠する恣意性を免れない。むしろ小林秀雄「断  
片十二」自然の描写」「青銅時代」大正二・三・一〇を引例し、「単  
純正確な表現」が〈鋭い美的感覺〉と結びついているとする吉田の見  
解の方が、「一つの脳髓」の文体の同時代的な意味を指摘ししている  
だろう。さらに言えば、〈私〉は〈何んだか頭の内側が痒い様な気が  
した。腫物が脳に出来る病気がある相だ。自分のにもそんなものが何  
処かに出来か、つて居るのではないかしら」と自己の病覺・身体器官  
に敏感であることから、内向的な性格傾向が指摘できる。この〈私〉  
の鋭い感受性と内向的な性格傾向は、〈神経衰弱〉になる性格素質を  
〈私〉がもっていることを示す。

このように〈私〉の觀察姿勢はあくまで〈私〉の人物造型の問題と  
して意味づけうる。志賀直哉の表現に類縁性をもっているのは確かだ  
としても（例えば同じ他人の足のけがを、志賀「子供四題」〔改造〕  
大正一三・四の〈私〉は〈きたない〉と感じ、小林「一つの脳髓」  
の〈私〉は〈厭な気〉をおこす）、志賀直哉流の対象への嫌悪感・嫌  
人性を（特に小林秀雄に）認めることは〈私〉が場合により対象の良  
さも認めているなど疑問である。

(6) ここまでで〈私〉は車掌を明確に批判しているわけではないが、それ  
でも船中において自分だけ探えない方法は如何しても発見出来なかつ  
た。バスの中から真鶴の風景を〈疲れた頭が見まい見まいとすれ  
ばする程、眼玉は反逆した。〔中略〕私は苛々として非常な努力で四角  
なセルロイドから目を離した。〕りする専制的な意識をもった〈私〉  
が、無自覚な行動を許容すべくもないことは推測しうる。

(7) この場面〈私〉が感じている（非常に空腹な癖に胸が焼けて何も食べ  
られないと云ふ様な生理現象が頭の中で起つてゐた）という〈気持ち  
の悪い倦怠〉も、無自覚な行動の主体としての〈脳髓〉の内実を明か  
す。〈空腹〉とは知性（思考、思惟、反省）の階梯を欠いていること  
要するに頭を使わないことを示し、それでいて〈胸が焼けて〉いると

は無自覚な会話や前半部に顯著であつた直截的な好悪の判断に疲れ  
ていることを示している。

(8) 吉田（註1）。同一見解多数。

(9) 榎原修（註3）。なお自意識を特異化する解釈の根拠でもあろう。

(10) 例えは広津和郎「志賀直哉論」〔新潮〕大正八・四に「氏は何等の  
増減なしに見なければならぬものをちやんと見てゐる」とあるほ  
か、同様の表現は木下幸太郎「立体派の画」〔文章世界〕大正五・  
六、和辻哲郎「自然」をよく見ない人」〔文章世界〕大正六・四、  
田中純「新技巧派の意義及びその人々」〔新潮〕大正六・一〇、石  
坂養平「芸術的アプリアオリ」〔文章世界〕大正六・一〇、芥川龍之  
介「蛙と女体」〔帝國文学〕大正六・一〇などに見られ、「一つの  
脳髓」の〈物事を判断と視るという問題が、大正期の文学言説とし  
て定型であつたと言える。

また認識の不十分を表象する〈暮〉という表現は、現象界から理  
想美を秘め隠しているものと解されるシェリーの詩語〈ヴェール  
を顕著な例とする（桂田利吉「ゴウルリッジ研究」昭和四四・  
一〇）文学的表現と言へる。大正期の日本でも広く讀まれていたコー  
ルリッジ、アノルド、ペーター、シモンズら英文学批評にも数多く  
用いられている。大正期の日本の文学言説にも見られる同様な表現  
（素木しづ「松葉杖をつく女」『新小説』大正二・二、正宗白鳥「文  
芸雜感」『中央公論』大正二五・一など）はそれらの訳語と考えられ、  
「一つの脳髓」もその一例と言えよう。なお直接にはベルグソン「笑  
の研究」（大正三・四、広瀬哲士訳）を参照したかと思われる。

(11) 〈神経衰弱〉の一症例として、〈神経質のコードモは普通人の食はぬ物を  
好んで食ふ〉という〈興食〉の症候があげられる（三田谷繁「子供  
の神経質」）。なお日本壁（室内壁）には蕨や糊などを入れる（今和次郎  
「農村家屋の改善」昭和八・一一、「建築大辞典」昭和四九・一〇など  
参照）が、これによって壁土は最後の食料となりえたか（菊池寛「義  
民甚兵衛」『改造』大正二・一四）。

(12) 森田正馬が〈後天性神経衰弱症〉を「身体の衰弱」と同義であるとし  
て〈神経病〉に分類するのを否定、特に〈神経衰弱〉の〈刺激性衰

弱を「実際に生活機能が弱く、精神的に起る」(仮性の刺激性衰弱)とし、「神経衰弱」とは区別して「神経質」と命名した。

(15) 「神経質」とはいわゆる神経症により近い考え方であつて、したがつて「神経衰弱」から「神経質」へと言葉を変更する際には、神経が衰弱して発病したとするか、心因性の心身機能障害とするかのパラダイム転換が行われているのである。この時期に「神経質」という用語を使用する場合、森田の見解を踏まえ、いわゆる四大性格のうちの一つとしてではなく、「神経衰弱」症を指している(三田谷啓「子供の神経質」、三宅鉦一『精神病学提要』昭和七・一)。ただしこの「神経質」言説も、いまだ「一つの脳髓」の当時にあつては「神経衰弱」言説に含まれていたと考えられるので、本稿ではあえて「神経衰弱」で統一している。

(16) のちに森田療法と称される「特殊療法」に特異性が見い出されるむきもあるが、「特殊療法」の作業内容自体は、石田昇「新撰精神病学」(明治三九・一一)、三宅鉦一『精神病学纂録』(明治四五・一二)で紹介されているものに近い。森田の「特殊療法」が、巢鴨病院での作業療法の改良であることが推測される。むしろ当初「特殊療法」の特異性は、作業療法がもたらす患者の精神の「転導」の必要性が、「神経衰弱」症者の心理機制から合理的に説明しえていた点にあつたと考えられる。

(17) 森田正馬は同じ赤面恐怖症者の「神経質及神経衰弱症の療法」および『変態心理』(大正一〇・一二)誌上で治療例のなかで、「神経衰弱」を全うなるものは精神的影響から起るもので、主観的のものである」と主張、物質療法に頼らない精神療法の理念を明示している。

(18) 大原健士郎「新しい森田療法」(平成一二・六)を参照。  
(19) 「書院」のくりの伝統」がもたらす、座敷を中心とした一家一室の古い住宅の空間構成に対し、明治三〇年代に入ると、グライバシーの確立とともに「室の独立化」が主張され「格式的・心理的な障壁」に代わり、具体的物質的な手段が要求された(西山卯三『日本のすまい』(武)昭和五一・六)。こうした在来住宅批判は「家族個人間のグライバシーの欠如への批判」を意味している(図説「近代日本住宅史」

平成一三・一二)。例えば正宗白鳥「象牙の塔」(「改造」大正二一・五)に「彼れの書齋は自分で象牙の塔になぞらへて、妻もあり子もありませんが、家庭の俗事に大切な頭腦を悩まされぬやうにと心掛けて、妻の居室の声も洩れて来ぬやうに、厚い壁で遮つてゐた」とある。

(17) 呉秀三「文明と神経衰弱」(「読売新聞」大正二一・五・二〇)はじめ、同様な「神経衰弱」像は新聞記事に多数見られる。こうした「神経衰弱」像は、正宗白鳥「さまくな不安」(「中央公論」大正三三・六増)など小説中にも形象化されている。もつとも森田正馬は「神経衰弱」を「文明病」と考えることには反対している。

(18) 「一つの脳髓」の当該箇所も同様に解釈でき、この直前に回想された空気に「吸ひ付く」結核患者のイメージに自己を仮託することで、本能的に「神経衰弱」の治療を試みたと考えられる。「私」は「呼吸器病の療養所」の患者たちが転地療養しているさまを、「海の広い空気に、子供が乳首に吸ひ付く様に吸ひ付いてゐる」とし、さらに「空気の断面が一人の病人の喉からは入つて先で二つに分れる突起を無数に造つてザラ／＼してゐる」としていた。つまり「私」は結核患者の像に自身を転移させ、自己治療のために日本壁のざらざらした表面(日本壁の室内壁の代表的な種類のものは、表面に凹凸がある)を「ザラ／＼」した空気に見立てて、「子供」のように舐めようとしたに違いない。従来看過されてきたこの場面に、佐藤悦子(註三)は「深夜壁を舐めるような病的な自意識」を読み、吉本隆明は小林の忍耐の姿勢を読んだ(「解説」『近代日本思想大系』小林秀雄「昭和五一・二」)が、むしろ「私」の自己治療の側面を読むべきだろう。

広津和郎「小さい自転車」(「改造」大正二三・七)に「自分は脳の半面が痛んで来た。〔中略〕自分は顔を横にして、熟してゐる頬からこめかみにかけて、壁の柱の冷たい面に当てた」とある。志賀直哉「或る男、其姉の死」(「大阪毎日新聞」大正九・一・二三)の、人前で表せない喜びを、一人で壁に全身を押しつけるようにして表現する(後)も、「神経衰弱」ではないが、ここで引例しえよう。

(19) 森田正馬「神経質及神経衰弱症の療法」。森田は他にも赤面恐怖症者の電車内の「群集の顔」が「憎々しかつた」り、「電車からおりてホ

口蒸汽船に乗った。(中略)汽船の小さきみに頭へる音が腹立たしい」という症状を報告。《私》が《神経衰弱》症を表象していることは明らかである。

(20) 綾目広治(註3)。

(21) 長井政司(註3)。

(22) 山崎正和は同じ小説を引例し、不機嫌を「自己破壊の方向」に解消する「自虐」の姿勢を見出した(『不機嫌の時代』昭和五一・九)。山崎の言う不機嫌の属性は、思春期病理、自己同一性崩壊、自己疎遠感、関係構築の欠如、意志の無効性など、《神経衰弱》症とも共通する。ただ山崎が不機嫌自体に精神の覚醒という側面を見い出そうとする

ようには、「一つの脳髓」の《神経衰弱》を解釈するのは難がある。

(23) 日比嘉高(「翻訳」とテキスト生成)、『多文化社会における「翻訳」平成二二・六)参照。

(24) 杉田直樹も(小心の学生が神経衰弱にかかり易い)、『神経衰弱の駆逐』『帝国大学新聞』大正一四・一〇・五)としていた。

(25) 現在のところ例えば、岩井寛は対人恐怖症は思春期病理の傾向があるが、不安神経症は五〇代まで多くの発症例があるとしている(『森田療法』昭和六一・八)。

(26) 吉田(註4)。

(27) 森田「神経質及神経衰弱の療法」。

(28) 志賀直哉「児を盗む話」(『白樺』大正三・一)、瀧井孝作「無限抱擁」(『改造』大正二二・六)、豊島与志雄「悪夢」(『改造』大正二二・八)、芥川龍之介「寒さ」(『改造』大正二三・四)、小川未明「踏切番の幻影」(『中央公論』大正二三・一二)参照。

(29) 吉田(註1)。

### 〔付記〕

「一つの脳髓」の引用は、初出によった。本文の採用にあたり、他に末尾の一文の改稿がしばしば問題にされる「一つの脳髓」(昭和八・一二)所収の別な本文もあるが、あくまで大正

一三年という時代における意味を検討する本稿の立場に則って初出に限った。また旧仮名遣いはそのまま、旧字体は新字体に改めた。

(おかだ ひろゆき 筑波大学大学院博士課程)

文芸・言語研究科 日本文学)